

# 雲取山での遭難

久家隆男

1994年3月のことである。我々新ハイキングクラブ井之頭支部の13人（男性6人、女性7人）のパーティは鴨沢から登った。ブナ坂辺りで雪が降り出し、雲取山山頂では横殴りの雪になった。



展望は全く得られないので早々に北面に下り、雲取山荘に宿泊した。山荘は建て直す前の古い山小屋であり、現在と構造が全く異なる。土間から上がると大部屋で、唯一の暖房器具である炬燵を囲み、天井から吊るしたランプの下で雑談した。缶ビールを注文すると冷えすぎていて、シャーベットの様になっていた。3月では宿泊客が非常に少なく、寝るときに布団を自由に使えた。しかし、湿気のある布団は重いだけで何枚掛けても暖かくなかった。私は持参したインナーシュラフに懐炉を入れて潜り込んだが、壁の隙間から冷気が入り込み、明け方はかなり寒かった。

トイレは山荘の外にあり、山靴を履いて行かねばならなかった。トイレは1段下がった所にあり、

そこに下る階段は固い雪で覆われ斜面になっていた。このため、慎重に下らないとスリップしてしまう。トイレに行くのにアイゼンが必要だなと皆で笑った。

翌日は快晴になったが、気温はかなり下がったようだ。雲取山の北面は1m以上の積雪があったので、厚手の雨具にスパッツ、アイゼンを付けた完全装備で6:50に出発した。山荘から直ぐに下りになるが、登山道は吹き溜まりになっていて積雪が多いので、敢えて登山道ではないが積雪の少ない尾根上を歩いた。40分位歩いた7:30頃に、後方で「Sさんが倒れた!」との声が上がった。引き返すと、S(50代後半)が雪の上に横たわっていた。何度も吐き、寒いと言う。目も見えないとのこと。下山を中断し、この場で様子を見ることになった。



しかし、1時間経っても快復の見込みが感じられないので、雲取山荘に救助を求めに男性2人が走った。直ぐに山荘オーナーの新井信太郎氏と山荘の若衆2人が来てくれた。山荘に担ぎ上げることになりそうだとことで、リーダーと私はザイル、毛布、鋸、鉋等を取りに山荘に行った。Sを座らせると直ぐに吐いてしまい、自力歩行は困難だった。Sは血圧が高い上に風邪をひいていたので、風邪薬の副作用で更に血圧が高まったのではないかと言う人がいた。

新井氏は近くの立木を切り、二本の木にザイルを廻して毛布を掛け、即製の担架を作ってくれた。そこにSを寝かせて担ぎ上げることになった。担架を前後2人の4人で持ったが、担ぎ上げるのにかなりの空間が必要になる。下ってきたルートは登山道ではないので立木や藪が多い。下ってきたときには立木や藪を除け、低い枝には頭をすくめて歩いたが、担架を担いで歩くには立木や藪が邪



魔になった。新井氏は先頭に立って鉈で小枝や藪を払ってくれた。それでも担架を担いでいる4人は急斜面の深雪のため足場が悪く、大変な労力を要した。女性には無理であり、パーティの男性はSを除いて5人。山荘の若衆にも手伝ってもらったが、15分も担ぐと息が切れ、交代で担ぎ上げた。加えて、Sは大柄で重かった。女性たちは自分のザックに加えて男性たちのザックを背負い、一緒に登った。担ぎ上げ開始が12:00、雲取山荘到着14:40。朝は40分で歩いたコースを2時間40分掛かった。



当時は携帯電話等がなく、新井氏は三峯のケーブル事務所に無線を入れて東京消防庁にヘリコプターによる救助を依頼してくれた。当初は、そこは埼玉県だろうとか、奥多摩小屋の近くにあるヘリポートまで

Sを運んでくれとかのやりとりがあったが、新井氏が強く要求した結果、雲取山荘の近くにある開けた場所にヘリがきてくれることになった。

やがて、ヘリが飛来し、ホバリングしているヘリから三人の隊員がロープ



伝いに降りてきた。隊員の二人は半分に分かれた担架をそれぞれ背負っていて、雲取山荘で組み立てて一つの丈夫な担架を作った。その担架に寝たままSを固定し、開けた場所に運んで行った。ヘリから垂れ下がっている太いロープに大きなカラビナを介して担架を吊り下げ、15:30に機内に収納した。私は撮影しようと近くに行ったが、ヘリのローターによる風が物凄く、クラストした雪片が水平に飛び散ってかなり危険な状態だった。そこで、太い木に隠れて数コマ撮影した。ヘリは八王子医療センターに飛んで行った。なお、Sは軽い脳梗塞で、幸いなことに後遺症はほとんどなかったようだ。

雲取山荘では大鍋に多量のラーメンを作ってくれた。朝食以降何も食べずに動いていたが、ラーメンの匂いで空腹に気が付いた。誰もが疲れていて、雲取山荘でもう1泊しようかという声が上がったが、明日は用事があるって今日中に帰らなければならないという人が数人いたので、昨日登った道を下ることにした。Sはザックや靴を雲取山荘に置いたままヘリに収納されたので、我々はそれらを手分けして自分のザックに詰めた。

ラーメンを食べた後、直ぐに下山を開始した。16:10だった。雲取山には登らずに巻き道を通り、休憩なしで歩く。ブナ坂からヘッドランプを点灯した。真っ暗な雪道で、夜になって凍結している所もあるので、安全のためにアイゼンは付けっぱなしにした。鴨沢で呼んだタクシーに乗り、青梅線の終電車にぎりぎり間に合った。非常に長い1日だった。

倒れた所が雲取山荘から比較的近く、且つメンバーが大勢いたので8時間後に救助できたが、そうでなかったらもっと長時間になり、Sのダメージが大きかったかもしれない。今なら山岳救助隊に電話することになると思うが、どこからでも電話が通じるものではない。

なお、雲取山荘にスノーボードがあれば上述の救助活動がかなり楽だったと考え、井之頭支部では後日スノーボードを雲取山荘に寄贈した。